

【論文内容要旨】

博士論文

## ヘーゲル哲学における思弁の生成

阿部 ふく子

### 序論

本論文の全体を貫く問いは「思弁（Spekulation）とは何か」である。思弁という思考様式は、現代においてもはやほとんど新たに注目されることがなく、一瞥されるとしても、現実、実践、経験的領域の充実に対して空虚な、しかも誤謬おかしかねない思考といった消極的な意味で扱われることが多いだろう。思弁の概念史を俯瞰してみても、この思考が理論、神への観照、純粹理性の弁証論など、経験に対立するもの、経験を越えるものとして位置づけられてきたことはただちにわかる。しかしながら、ヘーゲルはこうした主要な傾向とは著しく異なった思弁の概念を提起した。ヘーゲルにおける思弁は経験と密接であり、経験の領域に深く沈潜してゆく思考である。

この思考様式を哲学的営為の核心に据える「思弁哲学」は、ヘーゲルにおいて哲学史上おそらく最後の全盛期を迎える。ヘーゲル亡き後は、その逆を行く思想、つまり媒介する知の極致ではなく、どのようなかたちであれ人間に直接与えられている事象や物に定位する思想が主流となる。哲学の対象は、実存思想や実証主義、現象学、科学哲学とともに、「より具体的で現実的なものへ」とシフトし、こうした傾向をそなえた探究精神が、思弁というそれ自体捉えがたい思考を凌駕してゆくことになったのである。

しかし他方で、哲学が自然科学・社会科学・生命科学などの諸科学、また常識に支えられた市民社会や日常の生活世界、感覚的世界等々における個別具体的な問題系に関わろうとすればするほど、それらの実質的内容に対する哲学の「抽象性」に直面するという逆説的な現象は、今日ますます免れがたいものとして迫ってくるように思われる。仮に哲学が「より具体的で現実的なものへ」と向かっているのだとしても、〈哲学が多様で具体的な事象を対象として扱うこと〉と、〈哲学そのものが自らを具体化すること〉とは必ずしも単純に連続してはいないようである。哲学が経験的なものを越えて何事かを認識し語ろうとするかぎり、ここには思弁がふたたび顔を覗かせている。アドルノの言葉を借りるなら、「哲学は観念論を拒否した後でさえも（……）観念論が栄誉を授け、観念論とともに忌避されるようになった思弁なしで済ませることはできない」のである。そうであるなら、哲学から思弁を放逐するその手前で、哲学に思弁的性格を認め、〈哲学は自らの抽象的・理論的性格をどのように人間的生の内実へと積極的に関わらせることができるのか〉という問題を当の思弁的思考はどこまで引き受け、展開することができるのか、と「思弁哲学者」に問いかけ、その応答を吟味してみることは、現代においてあらためて思弁を考え直してみる上でけっして無益な探究ではないように思われる。

本論文では、ヘーゲル哲学における「思弁」の射程と意義について、この思考様式そのものの明確な定義づけを直接的におこなうよりも、思弁的思考が他の諸々の思考と境界を接して際立つその生成的瞬間を捉えるという考察方法によって究明してゆく。なぜなら思弁は、ある静態的な思想の諸関係があるとき、そこに概念の律動を見て取ることで活動的になる思考だからである。

第1部「啓蒙から思弁へ」では、18世紀ドイツの啓蒙主義からドイツ観念論のあいだに見られる思想の転回点にいくつか注目しながら、ヘーゲルが思弁哲学をうち立てるにいたった思想動機との関連のなかで、思弁の意味を解き明かす作業をおこなった。知の具体性・多様性・公教性（Exoterik）が一斉に志向されていた啓蒙の時代に、なぜヘーゲルはあえて「理性の光」を遮り、秘教的な（esoterisch）思弁哲学の構築を企てたのだろうか。またさらに、〈啓蒙以後〉の時代に要請される思弁哲学として、単に〈啓蒙以前〉の教条主義的な哲学への回帰が企図されているわけではないと仮定するならば、それは啓蒙理性の諸々の事実をどのように引き受ける視点をそなえていたのだろうか。このような問題は、ヘーゲルが自らの思弁哲学を練り上げてゆく段階で批判し対決したさまざまな立場との距離関係を読み解くなかで考察されなければならない。

第一章では、啓蒙主義哲学の理念を概観した上で、その理念を汲んで登場した〈意識の事実〉の哲学と、ドイツ観念論の哲学の扱う問題圏の違いについて考察した。まずはドイツの後期啓蒙において流行した〈啓蒙とは何か〉をめぐる議論から、哲学の立場について比較的明示的に論じているラインホルトの論考「啓蒙についての考え」（1784年）を取り上げ、啓蒙の時代に要請される哲学（者）の使命／規定について確認した。ラインホルトによれば、万人が理性をそなえ、その開化が望まれる時代にあつて、哲学は少なくとも、〈哲学者のための哲学〉という観照的な領域で自足するのではなく、一般の人びとの思考とのあいだに確かな理路を保つような「中間概念」を自らのうちに組み込み、かつ提供できなければならないのだという。こうした啓蒙理念は、理論哲学の方面で、哲学の根本原理を思考の生成変化への探究ではなく「意識の事実」あるいは「意識律」という自明な原理にとどめる（思弁哲学者たちから見れば）安易な傾向を生む。フィヒテは知識学の立場から、「意識の事実」に定位してそれ〈以前〉にある事行を一切問おうとしないシュミットの哲学を徹底的に批判した。フィヒテのシュミット批判の論法はヘーゲルにも受け継がれ、意識の無限に多様な事実を収集するのではなく意識の事実の所以を問う次元にこそ哲学の本領を見定めようとする超越論的観念論の立場として表明されている。

第二章では、啓蒙主義による哲学の通俗化路線とは一線を画し、常識と哲学の有機的な関係を哲学的に考察しようと試みるニートハンマーの論考「哲学に対する常識の要求について」（1795年）を取り上げ、ヘーゲルの『差異論文』（1801年）の一節「常識に対する思弁の関係」との比較検討をおこなった。ニートハンマーは常識について、概念の諸連関や体系を理解しないまま単なる感情（Gefühl）によってのみ自らの確実性・普遍妥当性を要求する認識と規定した上で、哲学の課題は常識の「普遍的な声」を聴取し、懐疑論に抗し

てその普遍妥当性を「証明」することにあるという。また反対に、哲学がそれ自身の普遍妥当性を保とうとするならば、それは常識がたとえ素朴な仕方であれ告げ知らせてくる普遍的なものに根本的に矛盾することがあってはならないとされ、両者は自らの普遍妥当要求を異なる仕方でも共有し、相補的な均衡関係を保ちうるものとして捉えられる。これに対してヘーゲルは、思弁（哲学）と常識を、意識と無意識（知と無知）の構造によって捉え、「思弁は常識をよく理解するが、常識の方は思弁の営みを理解しない」と断言し、両者の懸隔を浮き彫りにする。常識は、直接的・現象的真理という制限されたかたちでしか絶対的なもの（絶対的同一性）と関わるることができない認識であり、「感情として現前する暗い全体性」である。ヘーゲルは、常識と思弁とのあいだに認識レベルの懸隔を見いだしつつも、両者の無意識と意識とを絶対的同一性において知る思弁理性にこそ、自らの有限性を「止揚」しうる生きた主体の統一的あり方を見定める。この有限から無限へと高まりうる主体の動的な統一において、常識と思弁の「出会い」は果たされることになる。

第三章では、同一哲学期のシェリングの著作『ブルーノ』（1802年）と、シェリング・ヘーゲル共同の論考「哲学的批判一般の本質」（同年）および『精神現象学』（1807年）に即して、哲学の公教性と秘教性をめぐる問題を考察した。啓蒙以後、批判哲学を経て登場してきたシェリングやヘーゲルの思弁哲学においては、啓蒙のもたらした通俗哲学が徹底的に批判的となり、「哲学は本性上秘教的である」ということがあらためて強調されることになった。こうした言葉は一見、啓蒙以前のドグマへと回帰する思想にも見えるが、とりわけヘーゲルの場合上記の発言は、〈本性上秘教的な哲学が啓蒙以後の時代にそなえていべき公教性とは何か〉という葛藤に満ちた問いと切り離せなかった。シェリングは知的直観にもとづく同一哲学を構想し、一般的・自然的な認識主体が哲学へとむかう通路を意図的に遮蔽した。他方でヘーゲルは、哲学の公教性と秘教性を、知と無知が織りなす弁証法的経験という同一地平へと還元する。つまり、哲学は常識に対してたえず転倒の思考でありつづけるという意味では秘教的であるが、この秘教的な哲学の思考そのものへと自然的意識を知の経験にいざなうために、哲学は知的直観から開始するのではなく「悟性性／わかりやすさ（*Verständlichkeit*）」をその導入的側面としてそなえていなければならないのだとされる。ヘーゲルの思弁哲学は、通俗哲学の目的化された公教性と、同一哲学における知的直観の秘教性とを止揚し、目的ではなく手段として現実化されるべき公教性のあり方と、知的直観ではなく万人に開かれた弁証法的な公教性を要請しているのである。

第 II 部「思弁と教養形成」では、思弁が人間の教養形成（*Bildung*）とどのようなかたちで関わりうるかという問題について検討した。ヘルダーリン、シェリング、ヘーゲルは断片『ドイツ観念論最古の体系プログラム』（1795/96年）において、〈哲学の神話化〉〈神話の哲学化〉という象徴的な表現を用い、合一哲学の理念に合致した〈新たな啓蒙〉の可能性を見いだそうとしていた。「啓蒙」が本質的に人間の教育および教養形成と不可分であるとするなら、この実践的な観点は彼らの哲学構想のなかにどのようなかたちで組み込まれていたのだろうか。三者の体系構築そのものは異なる道をたどるが、ここではニートハン

マーの新人文主義やカントの啓蒙主義的な学習論を触媒としながら、〈新たな啓蒙〉としてのドイツ観念論の教養形成論の特徴と、ヘーゲルの哲学体系の実践的・方法論的側面について考察した。

第四章では、〈新たな啓蒙〉が新人文主義と合流するにいたる経緯を描き出すことによって、ドイツ観念論の教養形成論の一端を示した。〈新たな啓蒙〉の原型は、ヘルダーリンの未完の論考『哲学書簡の断片』に遡って見いだされるが、そこでは近代の形式的な道德観や形骸化した教養のあり方が批判的となり、それに代わって「より親密な生の連関」を感得するための「より高次の啓蒙」が要請されていた。ヘルダーリンが提起したこの構想は、やがて間接的にニートハンマーとシェリングの教養形成論へと受け継がれてゆく。ニートハンマーは教育学の著作『現代の教育教授理論における汎愛主義と人文主義の抗争』（1808年）において、人間精神の教養形成の意義をめぐる啓蒙主義（汎愛主義）と人文主義の二元論——精神の鍛練を実利的な目的のための手段と見なすか、目的そのものとして見なすか——を調停し合一する新たな人文主義を唱えた。シェリングは『学問論』（1802年）の時点で、啓蒙絶対主義国家の実利主義的学問観、また哲学の他律化に抗して、哲学の国を古代ギリシアのポリスになぞらえ、哲学が扱う諸理念は「自由民」でなければならないと説いていた。しかしこうした純粋な人文主義は「極端な理念」にすぎないと自ら葛藤を示してもいた。他方、シェリングは1809年の「ニートハンマー批評」のなかで、著者にほぼ全面的に賛同しつつ、この極端な人文主義を脱却し、啓蒙主義的教養において重視される「有用性」の観点に理解を示すようになる。功利主義精神は、それが個別者の「獸性 Tierheit」に視野を限定する思想となる場合のみ廃棄されるが、神の統べる世界、あるいは人間社会といった全体との有機的連関において理解されるならば、真の意味において正当化される。精神は、自然的・機械的なものに魅了された近代の自己の状態を弁証法的に対自化することによって、より高次の精神へと自らを形成することができる。逆説的な表現をするならば、そこで考えられた高次の啓蒙とは、従来の啓蒙によりもたらされた蒙をひらき、人間的生をつねに自律的な仕方で把握しつづける精神を遍く呼び覚ますことだったのではないか。

第五章では、カント『哲学的エンツュクロペディー講義』（1767/68-1781/82年）とヘーゲル（『精神現象学』及びニュルンベルク時代の教育論）を取り上げ、〈教えられ、学ばれる〉ことを前提とするかぎりにおいて哲学体系はどのような方法論を実践的側面としてそなえていなければならないのか、またそうした方法論に従うことで、学ぶ主体の教養形成はどのような思考を獲得することができるのか、という点について考察した。カントは自らの批判哲学と啓蒙精神にもとづいて、〈哲学すること〉は〈アプリオリに自ら考えること〉であるとし、これを既存の哲学的認識の諸内容について単に歴史的・模倣的に学ぶことから厳密に区別した。「哲学は模倣から自由であるべき」であって、哲学において教えられ学ばれるべきは「認識そのものというよりも、むしろ哲学するための方法」なのだという。ヘーゲルの場合は人文主義的な学問方法を重んじ、既存の哲学的認識内容や世界経験（歴史）にじっさいに触れるなかで出会われてくるさまざまな像（Bild）を媒介する主体の教養形成（Bildung）によってこそ、〈自ら考えること〉は真に達成されるのだとした。

第 III 部「思弁と共同」では、思弁的思考と客観的精神（人倫）の関係について考察した。ヘーゲルの人倫概念は〈全体は本性上部分に先立つ〉というアリストテレスのテーゼに支えられており、その全体優位の発想はしばしば共同体論としての正当性をめぐって批判的になる。ここでは、第 I 部・第 II 部で得られた帰結も念頭に置きながら、ヘーゲルの人倫概念におけるこのテーゼの意味を詳しく検討し、思弁的に見られた全体が、いかに個別と普遍の対立関係や二元論を拒むものであるかという点、またとくに人倫的自由の形成における承認のプロセスのなかで、近代以降けっして抽象化することのできない〈個〉の境位が、どのように固有のものとして確保されているかという問題について検討した。

第六章では、ヘーゲルが一貫してアリストテレス政治学に依拠して説く、人倫概念における「普遍の先行性」が、近代国家の原理としていかなる妥当性をもつのかという問題を扱った。アリストテレス『政治学』のテーゼ：「全体は本性上諸部分に先立つ」の解釈は、『自然法論文』（1802年）と「精神哲学草稿 II」（1805/06年）とのあいだで、契約論の批判的摂取の影響により変化している。結果として、ヘーゲルによるアリストテレステーゼ解釈には次の二つの意味が見いだされることになるだろう。ひとつには、両論稿に共通の解釈、つまり国家的共同体の自足性を正当化することであり、これはアリストテレス政治学本来の意味を受容したものである。そしていまひとつには、「精神哲学草稿 II」で新たに示された解釈、つまり個別的自由意志から普遍意志への教養形成を目的論的に正当化することであり、これはアリストテレス政治学を近代固有の意志ないし意識の原理に応用させたヘーゲル独自の解釈である。ギリシア的共同原理はその原義を越えて、個人と国家それぞれの意志を媒介とした肯定関係を新たに主張するための原理へと尖鋭化されている。従来の近代国家論と対決する上で原義がこのように解釈し直されたところに、ヘーゲルの解するギリシア的共同原理の近代的意義はあるということになるだろう。

第七章では、個別者が承認運動・教養形成を通じて普遍の境位にいたる過程を歩むとされる場合、普遍に対する個の固有性がどのようにして確保されるのかという点を問題とした。そのさいにまず『精神現象学』および「精神哲学草稿 I」（1803/04年）の「作品(Werk)」概念に注目し、ヘーゲルが作品の性質として〈個別的自己の実在性の証〉と〈社会的・普遍的意味付与の可能性〉の二側面を認めていたことを指摘した。続いてこれを踏まえ、ヘーゲルが承認運動の所産である社会的・普遍的な境位を「万人の共同作品」と称する場合、普遍に全面的に解消されてしまうのではなく、むしろ普遍を自己の内に再び意味づけていくという個別者の姿が、「個別性の救済」という明言のもとに示されていることを明らかにした。

第 IV 部「思弁の視野」では、主として『エンツュクロペディー』（1830年）における思弁の定義に即して、思弁的思考そのものの構造について論じた。思弁はヘーゲル哲学の核心をなす思考様式であるが、すでに論及してきたように、ヘーゲルはこの思考を単に従来理

解されてきた特徴（経験を越えたものについての思考、端的に抽象的な思考、知的直観など）のもとに捉えていたわけではない。ヘーゲルの思弁概念は、むしろそうした従来の規定における限界性や困難を射程に捉えており、それらが止揚される文脈のなかでこそ真に解明されることができる。

第八章では、思弁の抽象性をめぐるヘーゲルの思考について考察した。絶対者へとむけられる有限者の視座である「思弁」は、矛盾に満ちた精神の弁証法的運動にどのような地平を開示するのだろうか。そのさいとくにその思弁の視野が、思弁を経験にとって疎遠な理論的・抽象的思考と見なすようなカントひいてはアドルノ、ホルクハイマーらの理解を覆す内容をそなえるものであることを示した。『エンツユクロペディー』ではたしかに思弁的理性の抽象的側面が認められているが、しかし特に『精神現象学』における「思弁的命題」の意味や『論理学』（1811年）における「抽象」の規定を参照するならば、ヘーゲルの思弁理性は悟性的抽象の域を克服して、抽象的なものの中に具体的なものを、すなわち弁証法的経験の過程・成果およびそこから投機される有機的全体性を看破する思考として規定されていることがわかる。とはいえ、このことを通して、思弁理性が投機的に見定める個と普遍の有機的全体性のうちに、シェリング的な現実存在（Existenz）の可能性がどのようなかたちで確保されうるかという問題が課題として生じてくる。

第九章では、ヘーゲル亡き後、その理性主義の哲学に対して根本的な批判を展開し、後の時代のヘーゲル批判の支柱にもなっている後期シェリングの〈現実存在の哲学〉を取り上げて、前者による〈理性の思弁〉と後者による〈理性の脱自〉という考え方の接点と差異および対話的理解の可能性について論じた。ヘーゲルは、理性に思考の抽象性がともなうという一定の限界を認めた上で、抽象的なものと表裏一体をなす具体的な規定内容を開示するところにまで思弁の視野を拡げることから、理性の可能性を開こうとした。シェリングの積極哲学は、理性によっては捉えきれない偶然性を秘めた現実世界が存在する〈こと〉から出発し、理性は脱自態に直面しそこから自己還帰を経てアポステリオリな仕方ではじめて、自らの内容に現実性を吹き込む可能性を得るのだとした。両者のあいだに存しているのは、理性主義か非理性主義かといった単純な対決図式より以前に、哲学は理性とその他者との関係のうちどのような生成を捉えることができるのか、という問題への共通の取り組みであり、それにより理性の可能性を具体化する試みであるといえるだろう。しかし、ヘーゲルとシェリングとでは、理性にとっての現実的なものないし現実存在として想定されたものの内容がまったく異なる。ヘーゲルの場合、現実世界にはすでに理性的なものが働いている。〈理性的なもの＝現実的なもの〉というテーゼは、シェリングの批判によれば、アプリオリに決定された自らの内容を経験的事柄や現実性に対して適用させようとする理性の特徴を表していた。しかしヘーゲルにおける理性的なものとは、現実および経験に先立ってアプリオリに獲得されるものではなく、そのただなかで生みだされ、自覚されてゆくもののはずである。これに対しシェリングの『啓示の哲学』の関心は、そのような人間精神の生成としての現実をはるかに越えて、神の現実存在の把握にむけられている。最後に両者の対話的理解の可能性についていくつかの展望を示しておきたい。先に述べたようにヘーゲルにおける理性がもとより知の弁証法的経験というアポステリオリ

な側面をそなえているという点では、積極哲学の理性概念はヘーゲルと視点を共有しているといえる。他方で、現実世界の多様に対して外部から必然性の威力を行使するかのよう  
にヘーゲルの理性を理解し、それに対して現実存在の実在性や偶然性を守ろうとするシェ  
リングの批判が真に妥当性を得るためには、ヘーゲルの絶対的観念論の企てそれ自体にま  
で踏み込んだ批判的考察が必要となるだろう。ヘーゲルにおける本質と現実存在の一致、  
そして必然性と偶然性の統一は、従来両項が区別と対立の相において捉えられ、それゆえ  
各々が有限なあり方をしてきたことへの批判をすでに含んでいる。両項に共に固有の自由  
な領分を与えるという意味で合一をなすのが絶対的観念論の立場なのであり、対立する諸  
規定を有機的關係において捉え、積極的＝肯定的な成果をもたらすという思弁理性の役割  
は、まさしくこの次元でこそ果たされているのである。

## 結論

本論文では、ヘーゲルの思弁哲学の意義と射程を、啓蒙主義やカント、フィヒテ、シェ  
リング哲学などの立場との接点や距離感を確かめながら解明してきた。最後に、これまで  
の考察から得られた帰結を順にまとめておきたい。

第一に、ヘーゲルは、啓蒙主義の特徴である「世界智」、「意識の事実」や「常識＝健全  
な人間悟性」への定位、哲学の「公教性」の要請について、これらを全面的に目的化しよ  
うとする営みを「非哲学」と批判しながらも、〈哲学する主体〉を自らの思弁哲学へいざな  
うための否定的な契機として確保した。同一哲学期のシェリングは、知的直観による絶対  
的なものの把握を目指すことで哲学の秘教性を取り戻そうとしたが、ヘーゲルはこの観照  
的な、いわば〈哲学から始まる哲学〉には賛同せず、あくまでも啓蒙の時代〈以後〉に現  
実として可能な、さまざまな認識主体に開かれた哲学を構想する。ヘーゲルもまた哲学の  
秘教性を強調するが、それは、万人の理性を哲学へといざなうという公教性を確保した上  
で、知と無知がたえず交替する弁証法の地平へ導く、という構造においてはじめて成り立  
つものなのである。思弁はこのとき、啓蒙理性＝悟性の闇を照らしだす日の光のような思  
考だと言われる。

第二に、ヘーゲルの思弁的な哲学体系（著作としては『エンツュクロペディー』）には、  
哲学を学ぶ主体の教育・教養形成論が、その実践的側面として自覚的に組み込まれている。  
当時、カントも含め多くのドイツの哲学者たちが、各々固有の哲学体系を構想し、これを  
「エンツュクロペディー」という講義や著作に梗概化して表していた。A・W・シュレー  
ゲルによれば「エンツュクロペディー」の原義とは「すべてを包摂する教授（Unterricht）」  
である。とりわけニュルンベルク時代のヘーゲルには、このエンツュクロペディーが「い  
かに教えられ、学ばなければならないか」という教授法的な視座が見られる。「哲学する  
こと」と「自ら思考すること」とが同一のものになることを目指すのが啓蒙主義の教養理  
念であった。しかしヘーゲルはこの理念のうちでそれだけでは成り立たない抽象性を認め、  
人文主義的教養理念に拠りつつ、哲学する主体は既存の哲学の内容を学ぶ主体でなければ  
ならないと説く。ここには啓蒙主義の批判の的となった古きよき学校哲学の人文主義への

回帰が示唆されているのではない。ヘーゲルが前提としているのはむしろ、啓蒙主義的教養の徴表を取り込みつついかに克服するかという問題意識から構想されたニートハンマーの新人文主義であるだろう。学ぶ主体は、論理学、心理学、神学などの諸学問で、そして哲学の歴史的歩みの内容で思考を満ちし、それらをひとつひとつの像（Bild）として通り抜けるなかで自らの思考を鍛え上げ（Ausbildung）、そうしてはじめて自ら思考する＝思弁することができるようになる。だが、思弁的思考それ自体は何か実践的に教えられ学ばれるものではなく、教育によって知りうるのはあくまで思弁的なもの「表象」にすぎないともヘーゲルは言う。したがって、哲学体系の実践的・方法論的側面としては、最終的に哲学の理念を展望する思弁の境位は限りなく留保しつつも、思弁へと「到る道」を具体化することが目指されているわけである。

第三に、〈全体は本性上部分に先立つ〉あるいは〈普遍は本性上個に先立つ〉というテーゼを基礎とする人倫概念は、それが個と普遍の単純な二元論を、すなわちつねに純粋な区別と対立の相に捉えられる個と普遍の関係性をいかに拒否するものであるか、という洞察のもとに捉えられなければならない。したがって、ヘーゲルの人倫概念は従来、個別者の固有の境位を普遍的なものへと絡め取ろうとする権威主義的国家思想であるとの批判がじつによくなされてきたが、この種の批判のはつねにヘーゲルの二元論批判に照らしてその妥当性を吟味してみる必要がある。ヘーゲルが見据えているのは、部分や個と区別され、それらに対立するかぎりでの「全体」ないし「普遍」ではない。ヘーゲルの人倫論は、従来の権威主義的な近代国家論への批判から出発しつつも、それが定位していた近代的個の原理を閑却することなく、自らが当初抱いていた理想の「全体」であるギリシア的共同の原理との融合を果たすことによって、新たな「全体」像を描き直している。この人倫的全体のなかで個性が「救済」されなければならなかったとすれば、それは個性に対立する普遍からというより、対立の根源である個と普遍の二元論それ自体からの「救済」なのである。

第四に、思弁は定式化して言えば、悟性の規定作用によって抽象化されたものが、弁証法的理性の否定作用によって矛盾状態へともたらされるとき、その思考作用の総体のうちに概念の律動を捉え、それを担っている全体的なものへの展望を開く思考である。ただし、『エンツュクロペディー』で述べられていたように、思弁は、抽象的なもののうちに具体的なものを看破する思考ではあるが、思考であることの抽象性も同時にそなえている。なぜなら、思弁とは神の視点や知的直観ではなく、有限なものが無限なものを見据えて投機的におこなう思考であり、悟性や弁証法的理性が契機としてそのうちに保持されているからである。『精神現象学』に即して言えば、「思弁的命題」は、主語・述語から構成される通常の命題のうちに主語と述語の弁証法を見通す思考によって成り立ち、通常の命題に対してつねに破壊的性格をもっているにもかかわらず、命題の形式を完全に捨て去ることはできない。思弁に残されるこうした抽象性は、ともすれば具体的なものへの思考の進行を妨げ、思弁的なものとして提示した内容をふたたび悟性的な抽象物に変えてしまう契機となるに十分であるようにも思われる。しかしヘーゲルの視点は、こうした残余をも捉えて、



思弁がさらなる概念の律動と新たな全体性へとむかってその非完結的な思考を展開しつつ  
けてゆく地平にまで及んでいるのではないだろうか。

論文審査結果の要旨および担当者

提出者	阿部 ふく子
論文審査担当者	(主査) 教授 座小田 豊 教授 戸島 貴代志 准教授 直江 清隆 准教授 荻原 理 准教授 原 塑
論文名	ヘーゲル哲学における思弁の生成
<p>本論文は、ヘーゲル哲学における最重要な鍵となる「思弁」概念の生成過程を、新しい多様な仕方で精緻に分析し、ヘーゲルの思弁哲学の意義と射程を解明すべく試みた意欲的なものである。従来のヘーゲル哲学研究に見られる論理的術策に溺れた難解な叙述ではなく、啓蒙思想、教育思想、教養教育、人倫思想などに関するヘーゲルの具体的な思想的進展に即した「思弁」概念の解明に取り組み、明快な解説に成功している。全体は第Ⅰ部「啓蒙から思弁へ」、第Ⅱ部「思弁と教養形成」、第Ⅲ部「思弁と共同」、第Ⅳ部「思弁の視野」の4部の全9章、および序論と結論から構成されている。</p> <p>第Ⅰ部は18世紀後半の啓蒙思想とのかかわりにおいてヘーゲルにおける思弁の意味を明らかにするものである。メンデルスゾーンとカントの「啓蒙」をめぐる論争に、ラインホルトがかかわる視点から検討を加え、さらにはニートハンマーの常識哲学を取り上げるなど、新しい資料を駆使して啓蒙および常識とヘーゲルの思弁との関係を鮮明にする。すなわち、ヘーゲルは啓蒙および常識と思弁との同一性を丹念に探り、主体における意識と無意識の生き生きとした統一性にその可能性を読み取ったというのである。さらにシェリングの同一哲学を材料に哲学の「秘教性」と「公教性」の差異が論じられ、ヘーゲルの思弁哲学が両者の総合を企図して構想されたことが明らかにされる。</p> <p>第Ⅱ部では、青年期の一時期を共有したヘルダーリン、シェリング、ヘーゲルの思想的出発点と、その後の分岐の経緯を追いつつ、もう一人の友人ニートハンマーの教養形成論を手掛かりに、ヘーゲル哲学の実践的・方法論的側面から思弁概念が浮き彫りにされる。さらには、カントの『哲学的エントツクロペディー講義』を材料にヘーゲルの教育論が比較され、ヘーゲルにおいて「自ら考えること」と主体の教養形成とが不可分の一つになる経緯が思弁を介して明らかにされる。</p> <p>第Ⅲ部では、思弁的思考と客観精神(人倫)との関係が、イェーナ時代のヘーゲルにおけるアリストテレスの「全体は個別に先立つ」というテーゼ受容の問題と重ねあわされて論じられる。すなわち、人間の共同存在が個別(主体)と普遍(共同体)の近代的な主体の「理解」の問題として発展史的に分析され、ヘーゲル哲学におけるアリストテレス受容の意義が改めて強調される。さらにイェーナ後期の「作品」概念の分析を通して、「作品」を通じた共同体における「個別者の救済」が描出される。</p> <p>第Ⅳ部においては、1830年の『エントツクロペディー』での「思弁」の定義に即して、その構造が細かく分析され、思弁概念の生成的特徴が明らかにされる。さらにはヘーゲル死後のシェリング哲学の「脱自」とヘーゲルの「思弁」が対比され、後者の非完結的な思考の律動性が明示される。</p> <p>以上の論述は先行研究を綿密に吟味しながら、ヘーゲル哲学における「思弁」概念の意義を明らかにしたものであり、その成果は斯界の発展に大きく寄与するものであることは疑いを容れない。よって本論文の提出者は、博士(文学)の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	